

細胞診指導医会 会報



No.18 Nov. 1997

第36回日本臨床細胞学会秋期大会をお招きして ——横浜歴史的散歩——

第36回日本臨床細胞学会秋期大会会長 岡島弘幸

平成元年11月、第28回日本臨床細胞学会秋期大会が去る5月24日逝去された鈴木忠雄先生のもとで開催されてから8年、再びみなさまをこの横浜の地にお迎えすることになりました。折角横浜においでいただきましたので、横浜のことを少し知っていただきたくてご案内をさせていただきます。

嘉永6年(1853)6月3日、黒船襲来、この日を境に日本の歴史は大きく変わる。一気に幕末の激動期に突入し、近代の幕開けとなる。

泰平のねむりをさますじょうきせん

たった四はいで夜も眠れず

上喜撰は上等なお茶のこと、四隻は四杯とかけたもの。

当時の狂歌はご存じの方が多いと思う。幕府はペリーの恫喝に屈して、6月9日、浦賀の久里浜に急造した応接所でアメリカ大統領の国書を受取り、1年後の返事を約束させられた。ペリーは品川沖まで艦隊を進めて空砲数発をぶっ放した。

「10日、暮れ近くなりては、大砲をうちはなつ音遠雷のごとく房総の山々に響きわたりて、おびただしく聞こえたれば、都下の人心競々」と記録されている。

そして翌、嘉永7年(1854)3月3日、徳川幕府は武蔵野国久良岐郡横浜村の北端、現在の神奈川県庁の附近でアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーと日米和親条約を結んだ。近代日本の発祥の記念すべき地であり、文明開化はこうして始まった。

安政6年(1859)に開港された三開港場のうち、長崎と箱館はいずれも港湾都市としての経歴をもっていたが、横浜は長崎、箱館の二港とはちがい交通の便を欠く小さな農漁村に過ぎなかった。東海道筋から距離をおいたこの寒村を神奈川の名のもとに開港場に仕立てた理由は、停泊地としてより、東海道から離れた辺鄙の地に外国人を封じ込めて長崎の出島のようにする意図があったと思われる。

こうして翌、万延元年(1860)横浜を開港場とすることが確定するや、港湾都市横浜は幕府という政治権力によって一朝に創り出されることになる。権力によって創りだされた町であるから都市計画によって日本人と外国人居留地がまっ二つに分けられた。現在の横浜球場、横浜公園から海側にのびる銀杏並木の大通り(日本大通り)を境に左側が日本人町、右側が外国人居留人に分けられた。町の周辺の要所に関門、番所

が設けられて外部との交通をきびしく取締まった。現在の吉田橋は戸部、神奈川と開港場横浜を結ぶ最も重要な橋であって、日本最初の鉄橋“かねの橋”といわれて文明開化のシンボルであった。この吉田橋を境に、港の側を関内と呼んだ。この呼び名の名残りが今に残っている（JR 関内駅）。

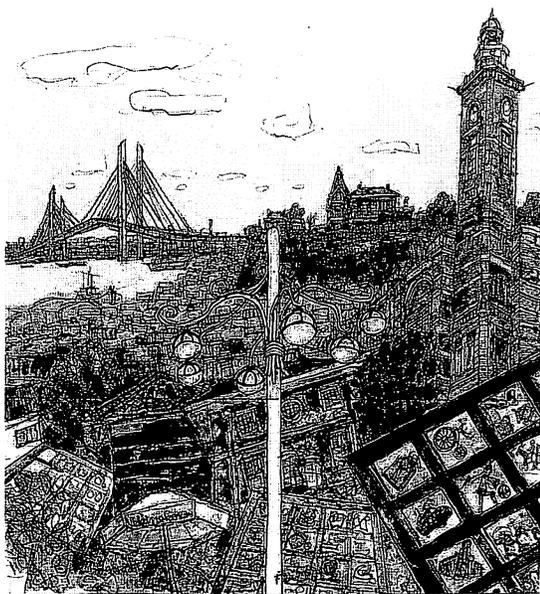
このようにして驚くべき早さで町の建築が始まり極東で活躍する商社が次々開店して海岸通りが整備され、また日本大通りの日本政府の建物が立ち並ぶ向い側には、アメリカ領事館、イギリス領事館、ロシア領事館も移転し、まさしく官庁街に仕立てられた。

時が経って大正 12 年（1923）9 月 1 日、関東大震災の激しい揺れと続発した大火のためこの第一世代の横浜は壊滅する。この時一番心配されたことは、横浜にとってかけがえのない生糸貿易が急速神戸に移り、横浜の商業上の地位が失われるのではないかということであったが、何とか立ち直った。外国人居留地の果しない建物跡の残土の山は海岸通りから港内に捨てられ、こうして埋め立てたところに数百米にわたって海浜公園が出現した。山下公園である。前回鈴木先生が主宰された第 28 回秋期大会はまさにこの山下公園を眼前にする県民ホールを主会場にして開催された。想い出をお持ちの方も多と思う。

そして第二次大戦、横浜大空襲、第二世代横浜の壊

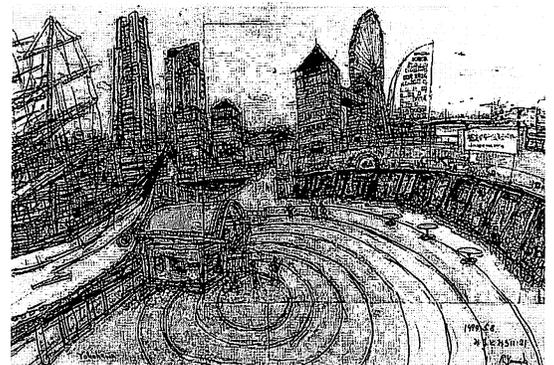
滅であった。厚木飛行場にコーンコムパイプをくわえて降り立ったマッカーサーが最初に連合軍指令部を選んだのは、かろうじて戦禍を免れたニューグランドホテルであった。現在のニューグランドホテルは昭和 2 年開業で、現在タワーが増築されたが 5 階建の旧館も改装されて 70 年の歴史をそのまま残している。横浜での米軍の駐留は長期に亘ったので他の都市に較べて横浜の戦後復興は大分遅れた。この混乱期に私はここで学生時代をすごした。

今回の会場となるみなとみらい 21 地区は、関内を中心とする旧市街と、戦後発展した横浜駅周辺地区に二分されてしまった横浜都心を一体化する目的で、旧三菱重工業（株）横浜造船所跡地を中心として横浜市がすすめているインテリジェントシティ整備計画に基づいて建設が進んでいる地区である。パシフィコ横浜は平成 3 年（1991）、ランドマークタワーは平成 5 年（1993）に竣工、その中間に位置するクイーンズスクエアも今年（1997）7 月 18 日、学会直前に予定どおり完成し、工事に伴う騒音、塵埃から解放された。パシフィコ横浜は横浜市が自慢する水と緑の憩いの場に接続する位置にある。季節的にも丁度良い時期にご来浜いただけたことを喜んでいる。学会の合間に新しい横浜を楽しんでいただければ幸である。



横浜風景（山田 喬教授・画）

平成元年横浜風景、山田 喬



平成 9 年みなとみらい 21、山田 喬

日本臨床細胞学会連合会の紹介

——北陸支部連合会——

北陸支部連合会会長 谷 本 一 夫

北陸支部連合会は、富山県、石川県、福井県の3県の会員307名からなる連合会としては最も小さい組織です。

標高3,000メートルになんなんとする立山、剣岳などからなる立山連峰を背負い蟹気楼の富山湾を前にして黒部峡谷・宇奈月温泉の富山県、北に輪島の朝市や和倉温泉の能登半島、南に白山を望む加賀百万石の城下町金沢と加賀温泉郷の石川県、東尋坊から越前海岸さらに三方五湖へと続き、永平寺など名刹と芦原温泉の福井県、3県ともに海・川・山など自然の景観に加えて多くの温泉に恵まれるとともに文化の香り高い歴史の町が数多くあるのが北陸です。

さて北陸での細胞診の足どりは、昭和30年代の前半までは病理学、血液学あるいは産婦人科領域などで散発的に行われていたようです。Papanicolaou染色による本格的な細胞診は昭和33年に金沢大学医学部産婦人科へ赴任された赤須文男教授により初めて診療に取り入れられました。昭和40年10月には第4回日本臨床細胞学会秋期大会が赤須文男教授を会長として金沢商工会議所会館で開催されました。その前後には、国立金沢病院産婦人科、金沢大学医学部産婦人科、第1外科、泌尿器科などで活発な研究・検査が行われています。それ以後は医師、臨床検査技師などの細胞診検査に対する関心の高まりとともに目覚ましい進歩・普及が続き現在に至っています。この間、昭和52年10月に服部絢一金沢大学医学部教授を会長として第16回日本臨床細胞学会秋期大会が石川厚生年金会館で開催されました。

ここで北陸支部連合会の成立の経過に関係あることについて一言。元来、富山、石川、福井の北陸3県は、行政上の地域区分では東海地方と併せて「中部地方」に属することが多いようです。各種の学術団体の支部も概ねこれに倣って地域区分をしているようです。しかし、こと医学関係では日本臨床病理学会など一部を除けば、支部発足当初はうまく運営できても、やがて学術集会開催地に応じて参加者が東海地方あるいは北陸地方に限定され、折角の集会目的を達することができず、東海・北陸に分離したものも少なくありません。

北陸は地勢からみても東の新潟県とは「親不知子不知の断崖」、西の近畿・滋賀県とは「栃ノ木峠と木ノ芽峠」、南の岐阜県とは「白山を主峰とする両白山地および飛騨山地」によって隔てられ、今でこそ鉄道・道路で便利になり、JRの特急電車で富山～新潟約3時間、

富山～岐阜約3時間半、福井～京都約1時間半と大幅に短縮されています。しかし、所要時間だけでは計り切れない風土・歴史の違いあるいは県民性でしょうか、良いも悪いも北陸の閉鎖性(?)が働くようです。

加えて、大都市がない北陸では、医師会員、技師会員ともに細胞診に専念できる会員はきわめて少なく、本来の業務の傍らやむを得ず細胞診検査に従事しているか、あるいは細胞診に関心を持っているものの細胞診検査には従事できないのが実状のようです。

また、学会会員の過半数を占めている技師会員(大多数は細胞検査士です)は、多忙な日常検査業務のために時間的余裕がなく、経済的にもほとんどの施設で支部学会には参加旅費を支給しないため宿泊を要する東海地方での学会参加に二の足を踏むのも容易に理解できます。

日本臨床細胞学会の連合会結成に際しては、以上のことを踏まえて、既に発足しておりました東海支部連合会への参加も念頭に、当時の東海支部連合会会長の木村禧代二先生に相談申し上げたところ、北陸は3県で支部連合会を結成した方が良いとのご助言をいただきました。支部連合会としてわずか3県で地域が狭いだけでなく、当時の会員数はわずか100名余で学会本部への申請も幾らか気恥ずかしさがありました。結局は、遅ればせながら北陸連合会の結成に踏み切り、日本臨床細胞学会会長より平成2年1月20日付 認定番号第7号をもって承認されました。

支部連合会の結成以前の富山・石川・福井各県での細胞診の研修・研究会は各医療施設内あるいは臨床検査技師会などで活発に展開されており、昭和59年に富山県支部および福井県支部が、翌60年に石川県支部でそれぞれ第1回の県支部学術集会を開催、以後年1回の開催を継続し、会員数の増加とともに学術集会の内容も充実を続けています。また、各県支部の学術集会とは別に、昭和59年金沢市で第1回日本臨床細胞学会富山、石川、福井支部合同学術集会を開催、第4回からは日本臨床細胞学会北陸地方会と改称、さらに第7回からは北陸連合会の結成を機に日本臨床細胞学会北陸連合会として開催地を金沢市・富山市・金沢市・福井市の順に持ち回りで年1回の開催を継続して、本年9月に第14回総会・学術集会を開催しました。

細胞診の普及に伴い、北陸支部連合会所属の細胞診指導医も順調に増加し、現在では富山県13名(細胞検査士36名)、石川県18名(細胞検査士66名)、福井県

5名(細胞検査士22名)の合計36名(細胞検査士124名)に達しています。しかし、細胞診指導医は都市部の大学や大規模病院に集中する傾向が他の地域に比べてもより強く、都市部から遠隔の地方病院などに勤務する細胞検査士の指導に問題を残しています。また、北陸支部連合会の特徴として、細胞診指導医が病理医と産婦人科医に偏り(内科医あるいは外科医は数名を数えるのみ)、呼吸器、乳腺、甲状腺、消化器、泌尿器など穿刺吸引細胞診や擦過あるいは洗浄細胞診が多

く、検体採取が細胞診成績を大きく左右する部門では、検体採取に当たる医師が何らかの形で細胞診検査に関与するよう願っていますが、残念ながらなかなか実現せず、他の支部連合会を羨ましく思っています。

以上、北陸の観光案内も兼ねて、北陸支部連合会の成り立ち、現況について紹介しました。また、紙上を借りて何かとご厚情いただいた多くの細胞診指導医の先生方に感謝するとともに、今後とも益々のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

第22回細胞診断学セミナーを終えて

日本臨床細胞学会教育委員会委員長 東岩井 久

柴田前委員長から引きつぎを受け、細胞診断学セミナーの実施委員長をつとめて3年目に入った。

細胞診断学セミナーも今回は第22回目となり、初回のセミナーで滝 九大名誉教授のお手伝いをした頃と比較すると、セミナー自体のもち方や受講者の顔ぶれも大変変化している。診断学セミナーがその時その時の要講に応じて、つぎつぎに姿をかえてきた結果なのだろう。

一昨年、昨年と受講者が漸減して、昨年は40名を切るまでになった。教育委員会では昨年から新しいセミナーの形を模索していたところ、指導医委員会の討議の結果、本年から試験の形式が変更されることとなり、1月の理事会で承認されたのはご存知の通りである。

最終的に決定された試験の要項は、受験科目の sub-speciality を増やし(総合科、婦人科、呼吸器科、消化器科、乳腺・甲状腺、泌尿器科)スライド投影の問題は全科共通の問題を全受験者に課すこととし、その内容は教育委員会の細胞診断学セミナーで教育された程度のものとする事となった。

したがって、教育委員会としては診断学セミナーでとりあげる内容が指導医を目指す人々の minimal requirement となることを大前提として、本セミナーの構成を考える必要に迫られる事となった。種々討議を重ねた結果、最終的には従来行われてきた方式を踏襲し、講師の方々にワークショップで検鏡するスライド以外に各領域で必要な知識を従来の講義の時間を延長して行っていただき、そのしわ寄せを検鏡症例をすくなくしてカバーする以外にないのではないかという結論に達した。全日程を4日以上とすることには種々の事情で無理があるので、午前中3時間を講義とし午後5時間の検鏡を行うというハードスケジュールとなった。

従来使用していた日本都市センターが改装中のため、昨年から日本青年会館を借用しているが、この会場は70人を越える実習スペースをとることが困難で、本年は実習と講義のかねあいから検鏡枚数を15症例とすると受講者は60名に制限せざるを得なくなった。

ところが学会誌にセミナーの公示を行った後に開かれた委員長会議で工藤前指導医委員会委員長より、本年は指導医試験要項が改定された初年度であることから、セミナー受講希望者の全員を受講させてもらえないかという要望があり、各講師にお願いし用意していただいた予備のプレパラート2枚を使用し68名までの受講者に対応できるように会場を設営することで準備を進めていた。

幸なことに申込期限をすぎて申込みされた1名を入れ、受講者は68名となり、あとは会場がすこし狭く窮屈なことを我慢していただければ良いということになった。

セミナー前日の夕、テキストの作成にあたった教育委員会の及川洋恵幹事と日本青年館を訪れると、会場はすでに診断学協会の平田理事と5名の助手の方々の手でセミナーの開催を待つばかりに設営されていた。

以下にセミナーの講師の方々のお名前と所属を記し(表1)種々のご準備と明解な講義に深謝したい。

本年は例年講師をつとめてくださっていた方の中で、婦人科系の何人かが同時期に開催された国際産婦人科学会(FIGO)に参加されたため、新しい講師の方々が加わってくださりセミナーに花をそえてくださったことも記録にとどめておきたい。

会場がすこし狭く、検鏡が開始された後の室温の調整が難しかった点、検鏡時間が1症例4分ですこし短かったなど反省すべき点は多々あったと思われるが、4日間のセミナーは例年のごとく滞りなく終了し、一

表 1 講師一覧

7月31日(木)		
消化器	中村 忍	金沢大学医学部第3内科
体腔液	木村 伯子	東北大学大学院医学研究科病理学講座病理形態学分野
胸腺・リンパ節	社本 幹博	藤田学園保健衛生大学総合医科学研究所病態細胞学研究部門
骨軟部・中枢神経	牛込新一郎	東京慈恵会医科大学病理学講座第1
8月1日(金)		
呼吸器1	宝来 威	大阪府立成人病センター呼吸器科
呼吸器2	斎藤 泰紀	国立仙台病院呼吸器外科
泌尿器	佐竹 立成	名古屋掖済会病院中検病理
乳腺・甲状腺	矢谷 隆一	三重大学医学部病理学教室
8月2日(土)		
婦人科良性・内分泌	武田 敏	千葉大学医学部付属病院中央検査部細胞診
異形成・上皮内癌	長谷川 壽彦	国立栃木病院産婦人科
頸部扁平上皮癌	伊藤 良彌	東京都多摩がん検診センター婦人科
治療による変化	山内 一弘	癌研究会附属病院婦人科
8月3日(日)		
頸部腺癌	田勢 亨	宮城県立がんセンター婦人科
体部腺癌	蔵本 博行	北里大学医学部産婦人科
絨毛性疾患	林 玲子	北里大学医学部産婦人科
付属器1	加来 恒寿	九州大学医学部産婦人科
付属器2	中島 久良	長崎大学医学部産婦人科

人の落伍者もなく受講証書をお渡しできたことをうれしく思っている。

セミナー終了後、九州地区の受講者の方から頂戴した私信を紹介させていただき責をはたすこととする。

「先週は、細胞診断セミナーに参加させていただきまして、ありがとうございます。4日間の毎日、毎日は長く感じられ、特に午後4時頃を過ぎると気が遠くなりそうでしたが、終わってみると密度の濃い貴重なセミナーでした。これも、東岩井先生を始め、このセミナー関係者の方々のご尽力の賜物と、深く深く感謝申し上げます。

顕微鏡、プレパラートともに立派なものを準備していただき、大変所見が取りやすかったです。こんなことを申し上げては病理学会関係者に叱られそうですが、数年前に受けた病理学会主催の同様な講習会では、顕微鏡が医学部学生の組織実習用で、標本は色落ちがひどいのも混ざっていてみづらかったので、なおさらそういう印象を受けました。

16人の講師の先生方の多くは、要点を的確にまとめてくださり、しかもプレパラート上のどの所見をさしているのか、理解しやすいように配慮してくださっておられました。とりわけ、最終日4コマ目の、長大中島久良先生は、カードの裏にポイントとともに異常所

見のカラー写真が貼ってあり、配布資料としてその白黒コピーを頂きましたのは、大変理解しやすく、その大変なご努力と熱意に、深く敬意を表するところがあります。配布資料として写真の白黒コピーを頂きますと、後日復習します時に、イメージするのが容易で、記憶力の衰えた小生などにとっては、大変助かる次第です。

標本1つにつき4分というのは、プレパラートをみて所見をみつけ、さらにメモをとっても十分な時間でありました。どちらかという、説明をもう少し長くして頂けたらと思いました。そのためには、開始時間を早めるか、終了時間が多少遅くなっても構わなかったのではと、私は思いました。

いろいろ勝手なことを申し上げました。お許し下さい。

この素晴らしいセミナーが、ますます発展することを、心から祈念申し上げます。

最後になりましたが、東岩井先生のますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。」

セミナーに使用したテキストは学会事務局を通じて指導医試験委員にお配りしていることをおことわりしておく。

名物指導医

——谷口一郎先生——

千葉市立病院 岩 崎 秀 昭

名物指導医として、大分県立病院がんセンター所長兼産婦人科部長の谷口一郎先生を紹介させていただきます。谷口先生は、大分県初の細胞診指導医としてご活躍されており、多くの指導医の先生方もご存じと思われる、名物指導医と呼ぶにふさわしい先生であります。

小生は1976年千葉大を卒業し、1977年7月から1979年12月まで癌研究会附属病院婦人科、故増淵一正先生のもとで研修を積ませていただきました。また、故久保久光先生、岡島弘幸先生（現 神奈川県立がんセンター部長）にもよく教えていただきました。谷口先生は1977年12月より1979年7月まで癌研婦人科で勤務され、同一時期に同僚として勤務させていただきました。先生が癌研を退職されてからも、公私共に親密なお付き合いをさせていただいているため、紹介させていただく機会を得ました。

今回紹介するにあたり、谷口先生に「指導医会報に名物指導医として先生のご紹介をするようにいわれました」と報告したところ、持前の快活さで、「ご苦労様」といわれました。その内容について、いくつかのことを申し上げたところ、「何を書いてもいいよ」といわれ、「先生の履歴など、小生が書く場合の参考資料としていただけたら」と申し上げたところ、「日母医報とか新聞に載っているからFAXで送ってあげるよ」とのこと、先生はいかにも意気軒高といった感じでした。履歴、職歴、現在の役員歴を拝見すると、先生は相当な要職に就かれておられ、このような立派な先生と今まで対等にお付き合いをしていたことを痛く反省し、自らを戒めめる次第であります。しかしながら谷口先生にも同様な傾向があります。先生はどのような高名かつ、私からみると恐れ多い先生でもひとたび自己紹介が終わると、以後は相手の先生と友人付き合いをすることが可能です。「あの先生だったら知り合いだから紹介してあげるよ」といった雰囲気となります。先生は容易に親密な交際が可能となれる、優れた資質の先生と尊敬しておりますが、高名な先生の中にはこのことで被害にあわれた先生がいらっしゃるのではないかと心配しております。

先生は現在県下唯一の県立がんセンター所長として、婦人科のがん治療、妊娠に合併した子宮がんの治療の他、NICU 30床を備えているため周産期医療にも従事され幅広く活躍されています。それぞれが全国のトップレベルにあります。折にふれ「子宮がんの治療数は年間100例」と全国一の規模を誇らかに語って

いました。大分県立病院がリニューアルした時は、病院の設計図を持って、その規模の大きさ、内容の素晴らしさを熟っぽく語られ、先生の意気込みを肌で感じ取ることができました。当時はその成績をまとめ、学会、論文などで発表し、諸先生方のご批判を仰ぐべきではないかと考えておりました。しかしながら、この後数々の学会で発表し、全国に大分県立病院の存在を認識させるに至っているのは衆知の事実であります。

谷口先生は現在、日本臨床細胞学会大分県支部長をされていますが、細胞学会に支部長連絡会議の発足の契機をつくられたのは先生です。指導医会は、総会、秋期大会と年2回開催されますが、ある日の指導医会で「各県に支部はあるが横のつながりがないので、他の県の情報がなかなか伝わらない」と訴えました。先生のご意見を基に現在の支部長連絡会議がつけられ、秋期大会に開催されるようになりました。支部長は、先生のように細胞診に従事され、細胞診にご理解のある先生にお願いしたいものと常々考えております。

癌研時代の思い出を書かせていただきます。小生より数ヶ月遅れて癌研に來られた関係でシステムなどは小生が教えましたが、臨床面ではさすがに経験豊かな先生で、よく教わったものです。また手術の際も当然のことながら、先生はかなり熟練しており、手術室でも指導していただいた記憶があります。癌研時代は細胞診を学ぶ機会が多く、外来担当となるとその日癌検診に來られた患者のスミアを増淵先生より早くチェックする必要がありました。そのため都竹正文さん（現細胞診断部技師長）によくお世話になりました。谷口先生もわれわれと一緒に細胞診を学び、鈴木博一先生（現在土浦にて開業）に師事いたしました。鈴木先生は非常に崇高にてまた優しい先生でしたが、細胞診ではわれわれを厳しく指導されました。3人でKossのDiagnostic Cytologyのtextbookの抄読会を行い、その際谷口先生はご自分の英語力の低さを嘆かれていたことを記憶しております。しかしながら、短期間で細胞診の特訓が実り、われわれは細胞学会と同時期に盛岡にて開催された指導医試験にめでたく合格し、後に論文提出し指導医となれたことは良き思い出となっています。

私生活について以下記します。谷口先生の話し好きは有名です。一緒に食事をする時は、会話の中心はいつも谷口先生です。そのため同席するすべての人は谷口先生に顔を向けることとなります。先生は楽しいエ

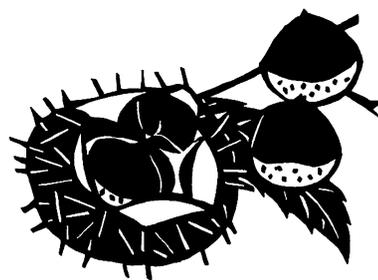
ピソードなどをおもしろおかしく話され、場の雰囲気
を盛り上げます。しかしながら先生は会話にピリオド
を打たないで話をするため、われわれは相づちを打て
ず、またわれわれの話を聞いていただけません。高名
な先生に有りがちな欠点で、以後この点に留意しとも
に語り合いたいものです。

先生の酒量は並外れており、小生のように酒をたし
なまない人間にとっては底なしのように思えます。酒
の飲み過ぎでの失敗はいくつもあります。あえて記
しません。しかしながら顕微鏡、電柱といった key
words で先生の記憶を呼び戻すことは容易でありま
す。カラオケは当時流行し始めでしたが、先生はご自
分の実力を知ってか、ほとんど歌わず、活躍の場を菅
生元康先生（現長野赤十字病院部長）に譲られていま
した。先生は、レパートリーが少ないこと、音程も不
安定でリズムにのれないなどの難点がありました。し

かしながら、10年以上経ったある時、二次会で先生の
歌を聴いて驚きました。先生の歌のうまさ、声量、声
の良さ、自信などは、高橋亨正先生（現秦野赤十字病
院副院長）に匹敵する程でありました。聞くところによ
ると、先生はご自宅にカラオケセットを購入された
そうです。

先生は現在も大分県のみならず、全国の学会を渡り
歩き、その際大分空港でお土産を買い、学会で会った
先生に配っています。時に最後に会い、「先生しかいな
いからあげるよ」といわれ、いただいたことがあります。

家庭内では、才色兼備な奥様と、優秀なご子息に恵
まれ、いつも順風満帆な先生です。今後も細胞学会、
指導医会の発展に寄与されることと思います。今後の
ますますのご活躍を心よりお祈りし、本稿を終えさせ
ていただきます。



新指導医となって

国立栃木病院産婦人科 佐久間 雄 一

本年度より、細胞診指導医の仲間入りをさせていただくことになりました。今後いろいろとご指導賜わる場面も多いと存じますが、どうぞよろしく願いいたします。

私は、平成元年に慶応義塾大学医学部を卒業後、産婦人科学教室に入局し、その後婦人科病理研究室に所属、平成7年より国立栃木病院に勤務しております。初めてスライドガラス上に固定された細胞をこの目で見たのは、婦人科病理研究室に入ってからであり、当時は「婦人科病理の一員である限り、指導医となるのは当然のこと」という長い伝統が存在し、何ひとつ細胞診の知識のなかった私は、「虎の穴」に迷い込んだ羊の様な気分でした。しかし、今こうして無事に婦人科病理の一員となるのが出来たのも、慶応大学では野澤志朗教授、そして国立栃木病院では長谷川壽彦院長という、この上ない指導者に恵まれたおかげと感謝しております。

さて、「人は見かけによらぬもの」といいますが、「細胞は外見がすべて」というのが細胞診の基本理念であり、その細胞の顔つきから、由来・性格、さらには将来像までを占おうとする学問です。人相占いとの違いは正確に的中させるのが当たり前という点でしょうか。しかも、さらに細胞診の習得が困難に思える理由のひとつは、人間の持つ五感のうち、「視覚」だけに頼ってすべてを判断しなくてはならない点です。通常、われわれは臨床の現場で、視診・聴診・触診と種々の所見からの総合判断により疾患名を確定しますが、細胞診では、その判定は補助診断とは異なり確定的なものであるにもかかわらず、「視覚」というたったひとつの感覚のみから判定が行われます。視覚による他の画像診断では、補助的診断法であるという性質上、その報告内容は、たとえば「良性疾患と考えられるが、悪性の可能性も否定できない」などというものでも許容されます。しかし、細胞診判定でこのような報告は通常認められず、もしもこのような返事を受け取れば、臨床の現場では、最大の期待を裏切られ、大いに落胆することとなります。それほど、細胞診断は期待され、信頼されているということです。当初私は、「視覚」による診断を、より正確にするために必要なのは、唯一、

診断のポイントをより多く記した教科書を読むことにより得られる知識だけであると考え、次から次へと細胞診断学の本を買って読みふけりました。しかし、毎回実際の標本を検鏡するたびに、また新たな問題が生じて来るという繰り返しで、とうとう10冊にのぼる教科書をコレクションする破目となりました。そして、11冊目を買うことになる寸前に、ようやく気付いたのは、これらの優れた書物は、われわれが細胞診の正診にたどり着くまでの正確な地図の様なものであるということです。すなわち、目的地までの最短ルートを見つけ、そこにストーリーを付けるのは、自分自身であるということでした。そして、優れたストーリー付けに不可欠なのは、数多くの症例を検鏡することによってのみ得られる、「経験」であることが理解できました。実際、1枚のスライドガラスの上には、実にさまざまな細胞や所見がみられ、これらの中には診断にきわめて重要なものから、逆に診断を迷わせる原因になる不要なものまでが混在しています。地図上には不必要な情報は一切記されておらず、途中いちいちこのような所見に気を取られていれば、思わぬ迷い道に入りかねません。膨大な情報の中から、必要なものだけを選択し、かつ総合的に判断を下すには、何度も目的地に行き着いたことによる経験が、何より必要だとわかり、それからは病理室に保管されていた多数の細胞診標本を、片っぱしから検鏡してみました。それにより、あの10冊の優れた地図の読み方が、指導医試験の直前になって、やっと理解できました。その甲斐あって、現在こうして新指導医となった感想を書かせていただくことが出来たと思っております。Papanicolaouが50年以上も前に、その経験のみから開発した染色法が、現在でも最も優れた染色法のひとつとして利用されていることから、細胞診の世界での、「経験」の重要さがわかる気がします。前述の経過でも明白な通り、今の私には、診断の最大の武器である「経験」が著しく不足しております。今後、指導医の一員として、諸先輩方の功績に傷を付けることのないよう、一日でも早く一人前の指導医となれるよう研鑽して行く所存ですので、これからご指導の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

細胞診指導医になって

鳥取大学第1外科 貝原信明

もう10年以上前のことだが、毎年、大学入試共通一次試験に挑戦する婦人科の開業医がいた。みんな彼のことをオッチャンと呼んだ。変わった人だと思いつつも魅力を感じていた。北九州市での話である。私の少し先輩だから今も続けているとは思わないが、相変わらず何かやっているだろうと思う。彼の老け込んだ顔はみたくない。

僕も試験を受けるのは面白いと感じる部類に属する。一昨年は囲碁の昇段試験を受けた。こんなのは試験とはいわないといわれるかもしれない。

昨年の夏は英語検定試験を受けた。学生が講義に出てこないのにムツとして、僕も勉強するから君達も勉強しろといったのが仇で、英検準一級を受けることになった。同門の細胞診指導医（木村章彦先生）から、“先生が準一級とは情けない、受けるなら一級です”と挑発されたが、じっと我慢した。ちなみに彼は国連英検一級の実力者である。

おそらく大丈夫だろうと思っていたので、良くも悪くも結果を報告すると学生に大見えを切ったが、やっぱり駄目でしたという時の講堂の一瞬の静けさが嫌で、滑りどめに二級も受けることにした。準一級と二級は同じ日に受験することが出来るようになっていたので、もしやの場合には、準一級はいけなかったが二級には受かりましたと言いつい、教師としての面子を保とうとの魂胆である。結果はその通りになり、また新たな目標ができた。

細胞診指導医試験を受けろという話も昨年の初めからあった。教室の指導医（広岡保明先生）から、先生に指導医になってもらわないと困るといわれ、そんなこといわれても困ると言い返してきたが、このまま放置していたら教授としての体面を保つことができない空気がでてきた。

無理だと思うよと予防線を張りつつ、人にみられないように密かに教科書を広げ、やはり無理だと思う一方で、腕試しをしてみるかという気持になった。試験制度が変わることは聞いていたので、今回は不合格でもあまり気にすることはないと思った。

僕に指導医試験を受けるように強要した張本人は、相手が願書を出したので安心したのか、3ヵ月間ピッツバーグ大学に行ってきますと教室を留守にした。あとは面倒みますとばかりに、病理の指導医（安達博信先

生）が嫌になるほどのプレパラートを部屋に持って来てくれた。

認定医あるいは専門医の試験問題作成に携わってみるとわかるが、いかに面白いケースであっても、どれ程興味ある症例であっても、これを試験問題としてまとめることは容易ではない。そこに含まれる内容は誰がみても納得するものでなければならないし、常識を逸脱することは適わない。

だから受験必勝法は一つしかない。教科書。これに限る。練習用のプレパラートを一応はみてみたが、試験には教科書が一番よかったと思う。

一昨年、消化器細胞診指導医の指導者（小塚正雄先生）に引率されてマドリッドの国際学会に出かけた。そのとき知り合いになった婦人科細胞診指導医（斉藤みち子先生）から昨年の暮れに一通の電子メールが届いた。“指導医試験合格おめでとう。またいつか海外に行きましょう。ちなみに今年の暮れは私は娘を連れてエジプトに行きます”とあった。

羨ましいとは思ったが、本音を隠し、建て前かざり意気がって、僕は今年の暮れは家にて書道五段認定試験に挑戦してみますとメールを打ち返した。

昔から年の暮れは恵みの時で三余の一つとされている。三余とは、冬（年の余）と夜（日の余）と陰雨（時の余）で、心豊かに好きに過ごせる時というわけである。三余に書道とはいいいでしょう、という自慢心があった。

年が明けてメールがきた。“私も書道をしています。漢字書道六段です”とあった。

赤恥というが、本当に恥ずかしい時には顔は青くなるという新しい発見をした。年の暮れは心豊かに筆を持つと密かに自慢したが、上には上があるということをつかつかつにも忘れていたのが恥ずかしかった。

暫くしたら破廉恥にも落ちついて、またぞろ腕だめしをすることの面白さが戻ってきたので、メール友達に負けないように漢字書道六段に挑戦することに決めた。そして最近その認定書をいただいた。だから試験は面白い。

細胞診指導医試験に合格し、その道に精進しますと声小さくいう一方で、次は何に挑戦するか目下検討中である。

ハワイ国際細胞学会 Expert Conference に出席して

佐々木研究所附属杏雲堂病院副院長 杉 下 匡

1997年6月5日から10日までの間、米国ハワイ州ハワイ島ワイコアラ海浜のヒルトン・ホテルに於いて、国際細胞学会が主催するDiagnostic Cytology towards the 21st Century an International Expert Conferenceが開かれた。会の目的は生涯教育と精度管理であった。

世界各国のcytopathologistが参加していた。Conferenceの招請講演は5題であり、そのうち3題は日本であった。

それらを下記にご紹介しよう。

まず6日金曜日午前10時半より20分間、東京医大の加藤治文教授の講演であった。その内容は次のごとくである。

主題はCytologic Findings Early Central Type Lung Cancer and the Endoscopic Appearance of the Lesions from which they Deriveであった。内容は、近年、世界的に肺癌の死亡率が増加しており、その原因は喫煙と排気ガス、そして肺癌検診の遅れにある。と指摘し、早期検診の必要性を説いた。とくに客痰細胞診と内視鏡の必要性和有効性を説き、最近のトピックスとして7項目を上げられた。

それらは1)中心型肺癌への客痰細胞診の普及、2)早期中心型肺癌の細胞診所見、3)早期中心型扁平上皮肺癌の臨床所見、4)扁平上皮肺癌の早期、晩期の鑑別診断、5)早期肺癌の細胞診上の問題点、6)気管支鏡の早期肺癌同定の問題点、7)早期肺癌検診の未来像、である。

次ぎに同日午後4時半より慶応義塾大学の野澤志朗教授によって20分間講演された。

講演の主題はNovel Enzyme-Immunoassay for Endometrial Cancer Using Cytologic Specimensである。

内容は、子宮内膜細胞のenzyme immunoassay法の研究に伴って子宮内膜癌の強力にして特異的なモノクローナル抗体の開発に成功した。またさらに研究を続けて、この抗体を細胞診に利用して子宮体癌の診断学に応用した。

その時の陽性率は正常内膜で3.8% (2/53)であり体癌では64.3% (12/28)であった。

この結果は子宮内膜の酵素抗体法が子宮体癌の診断に十分利用できることを実証したと力説し、館内の喝采を得た。

その次ぎの講演は翌日7日土曜日午前8時から20

分間に杏雲堂病院グループの講演で天神美夫教授、私、坂本 優医長の主題が、New Approaches to Evolution of Diagnostic Cytology, Focused on the Correlation Between Cell Morphology and Genetic Changesである。発表は私が行った。

内容は、細胞診断学が従来通りにPapanicolaou染色一辺倒の方法論では、診断精度に沈滞が残るので、より発展的に診断精度を高めるためにも、新しい分子細胞学的手法を研究した。従来から行ってきたFluorescence *in situ* hybridization (FISH) やComparative Genomic Hybridization (CGH)などの方法を用いて分子遺伝細胞学を確立した。

現在は細胞遺伝子の変化と細胞形態の関係を研究中である。

われわれは近い将来により優れた細胞診断精度の発展が期待され得るものと信じている。

このようにして日本からのConference Lectureは3題とも大いに好評であったが、この他多くの日本人医師が座長にまたはSpeakerに活躍していた。それらの方々を少し紹介しよう。

まずTerminologyの分野ではContributorとして坂本 穆彦助教授、Colposcopy, Cervicography, Speculoscopy & Endoscopyの分野では野澤志朗教授、山内一弘副部長、川口 実氏、Seated at Podiumとして加藤治文教授が出席した。

野澤志朗教授の講演はThe Place of Hysteroscopy in the 21st Centuryと題して久布白先生と塚崎先生の共同研究であった。

また、HPV & Cervical Cancerの部門では、Seated at Podiumとして坂本 穆彦助教授も加わり、Contributorとして坂本 優医長も出席した。

Cell Preparation Methods and Criteria of Sample Adequacyの部門では、山内一弘副部長がSeated at Podiumとして出席し、西谷 巖教授、信田重光元教授、高橋正宜元教授などがContributorとして発表された。

特に信田重光元教授の“経十二指腸細胞診による胆肝膵系疾患の診断”に関する発表は超音波診断器に基づく胆肝膵の穿刺細胞診の手技や細胞採取法の話に花がさいた。

Computerized Screening Devices & Performance Assessmentの部門では、Seated at Podiumとして田中 昇先生が出席され、Contributorとして粥川 敦

先生，西谷 巖教授などが加わった。特に，西谷 巖グループ(針生，松田)の主題は特定の DNA プローブを用いた染色体の FISH の頸部細胞診への応用であった。

この他，Computerized Training & Proficiency Testing の部門では，Contributor として信田重光元教授，田中 昇先生が出席された。

ASCUS & AGUS Criteria の部門では，山内一弘副部長が Contributor として意見をのべられた。この部門はベセスダ・システムから派生した用語であり，ASCUS=Atypical Squamous Cell of Undetermined Significance と AGUS=Atypical Glandular cell of Undetermined clinical Significance の略字であり，その内容は米国，インド，を除き，香港，南アフリカ，ノルウェーなどの Contributor には良く理解されていなかった。

Digital Imagery/Telecytology の部門では，Co-Chairman に高橋正直元教授がされ，Contributor として粥川 敦先生，小林忠男先生，信田重光元教授が出席された。

Methods of Cost Benefit Evaluations の部門では，Contributor として粥川 敦先生，田中 昇先生が出席された。

最後に Medical Legal Affairs の部門では Contributor として池田正典助教授，小中千守助教授が参加された。

Registration された人数は，216 名であり，参加国は米国を初め，英国，カナダ，ギリシャ，韓国，香港，オーストラリア，ドイツ，ノルウェー，南アフリカ，ロシア，スイス，インド，フランス，ニュージーランド，インドネシア，スウェーデン，スペイン，ブラジル，ベルギー，オーストリア，ポーランド，クロアチア，フィンランド，日本の 25 カ国であり，日本人は約 25 名参加した。

島内には娯楽施設や繁華街は一切なく，勉強するには打って付けの場所だった。

印象深かったことは夕日の沈むレストランで，10 人ばかりの日本人とビールを片手に歓談した一時であった。



鈴木忠雄先生の思い出

神奈川県立がんセンター婦人科 岡 島 弘 幸

本会名誉会員鈴木忠雄先生は平成9年5月24日逝去されました。一生を婦人科腫瘍学のために捧げられ、特に細胞診の分野では子宮内膜細胞診の基礎を確立されました。享年72歳でした。

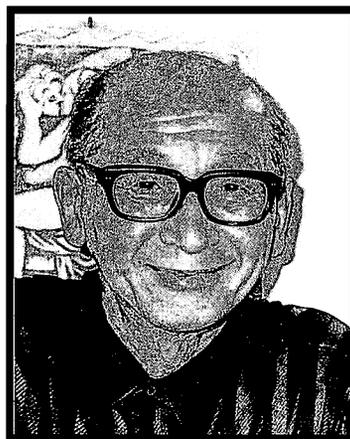
鈴木先生は大正14年のご出生、東京府立第八中学校、静岡高等学校を経て、千葉医科大学(旧制)を昭和24年にご卒業になり、千葉大学産婦人科、癌研附属病院婦人科、神奈川県立がんセンターで私ども後輩の指導にあたられ、平成元年には第28回日本臨床細胞学会秋期大会を主催されました。平成2年、神奈川県立がんセンター企画調査室長をもって公職を退かれました。

東京府立第八中学校以来のご親友には、現在東京母体保護医会会長でいらっしゃる大村 清先生、静岡高等学校同窓で身近にいらっしゃった先生では、橋本敬祐先生、横浜本牧でご開業の渡辺文武先生、鎌倉の竹田 節先生など、千葉大学のご同窓では杏雲堂病院名誉院長 天神美夫先生、千葉大学医学部名誉教授 高見沢裕吉先生がほぼ同年代のご卒業と思います。

私と鈴木先生とは癌研婦人科の同窓で、当時癌研四天王と呼ばれた大いなる先輩でいらっしゃいますが、私が入局した昭和48年には、一足早く当時の神奈川県立成人病センター婦人科部長として出られたあとであって、ご一緒に生活し、直接教えるようになったのは、昭和56年私が癌研から神奈川に移ってからでありました。

手術と鈴木先生—鈴木先生といえば手術の上手な鈴木先生ということで知られていましたし、日本産婦人科学会のビデオセッションなどでご存知の方も多と思います。鈴木先生の手術の基本は増淵術式ですが、鈴木先生独特の手捌きの器用さを活かした鉗づかいと、左手の長ペアンで鈴木式変法を考案していらっしゃいました。その基礎となっていたのは、癌研と国分寺の通勤電車の中で愛読された「誰某」の解剖書による骨盤内血管のバリエーションに対する理解と、それにもまして左手の箸で豆をつまむ訓練や、寿司屋の大形湯呑みの底で糸を結ぶ訓練を教えられた手先や、左手の器用さがあってのことで、齢をとってからこの世界に入った私などには、到底真似のできるものではありませんでした。

細胞診と鈴木先生—鈴木先生は昭和47年、日産婦総会で子宮体癌の宿題報告をしていらっしゃいますが、そんな関係で細胞診についても子宮内膜病変がご専門でありました。私が癌研から神奈川に移った昭和56年当時は、野田起一郎先生を班長とする厚生省の「子宮



体がんの早期診断に関する研究」(昭和54, 55年度)、「子宮体がんの高危険群に関する研究」(昭和56, 57年度)が進行中であって、私は時期的に後半でお手伝いすることになり、何度か大阪までお伴いたしました。老人保健法による第2次保健事業(昭和62年〜)から導入された子宮体がん検診のための基礎研究であったと思いますが、鈴木先生は子宮体がんの疫学的調査研究、内膜細胞診のクライテリヤづくりについて指導的な業績をのこされました。これらのお仕事は、当時の日臨細胞誌、婦人科MOOK(金原出版)などに掲載されています。

とにかく「メカ」大好きというご性格は少年時代からのもので、今でいう鉄道大好き少年であったようです。中学同窓の大村先生とは新幹線の運転席にのせてもらったり、果てはどう手蔓をつけられたのか、自衛隊の戦車にまで乗せてもらったという話を弔詞でのべていらっしゃいました。これが単なる遊びではなくて、癌研で手術材料記録用の撮影装置を考案されたり、癌研に移る前の長野県上山田温泉病院時代に、当時の女の児の遊び道具のリリアンのような物を臨床に応用されて、未熟児にチューブフィーディングを実践され、その方が無事成長されて今でも訪ねてこられるというお話もありました。

鈴木先生のお酒好き、煙草好きについても触れないわけにはいきません。酒の中でも濁酒のような素朴なものがお好きでした。お酒が入って饒舌になられた時の、独特のウイットに富んだお話し振りには皆が惹き付けられる雰囲気がありました。齢をとられてから酒席のあと怪我をされるようなことが起って、先生に酒・煙草両方やめてはつまらないから、酒は残して煙草はやめようと持掛けたことがありました。結局聞いてはいただけませんでしたが、今ではそれで良かった



と思っています。ご葬儀の折、火葬場での待ち時間に導主大楽院の和尚様が立ち上がって「72歳では今の時代ご短命かと思うが、話を伺っているとこの先生は実に羨ましい生き方をされていて、男冥利につきる幸せな方であったと拝察する」といわれたのが実に言い得て妙の印象でありました。

今年の正月、誠に珍しいことに私は先生から色紙を頂戴しました。「心に太陽」、芳堂、添書きに「さし昇る朝日の如くさわやかに…御歌の心がやっとわかってきたような気がして筆遊びをしてみました。今年は丑の年といわれても「モー」と叫ぶ聲はやめて「モット」といいつけて明るくさわやかな年にしたい。そしてゆっくり休まず御來光を拝みたい」…。これからたった4ヵ月、鈴木先生は帰らぬ人となりました。

合掌

太田邦夫先生の追憶

(株)日本細胞病理ラボラトリー社長 石東嘉男

4月のその日何気なく朝刊をみたところ、太田先生のご逝去が報道されており、それに短いコメントがついていて、わが国最初の心臓移植の死亡例について、先生のご見解が掲載されておりました。

昨年先生が膵臓癌のため癌研病院で手術されたとお聞きしたのでお見舞いに上ったところ、丁度、リカバリ一室より普通の病室に戻られたところで、割合お元気そうにみえ、他に見舞客もなかったので、付添っておられたお嬢さんを交えて久り振りに暫くお話が出来ました。これが先生にお目にかかった最後でした。その時先生ご自身は「がんだったが、手術が成功してほっとしている」とおっしゃっていました。しかし今回お葬式の時にお嬢さんから伺ったところでは摘出手術は不可能で、丁度昭和天皇のように単なるバイパス形成に終わったようです。しかし、私はそんなこととは知りませんから昨年手術は成功してお元気になられたものと思っていただけに今回のご逝去の報にはびっくりするとともに、それほどお悪かったなら、またお見舞いに行けばよかったと後悔しました。

皆様ご存じかどうかは知りませんが、先生の奥様は

私の記憶が正しければ確か柳田國男先生のお嬢さんで、大変おやさしい方でした。しかし永らくアルツハイマー病で入院され、そのため先生は日常生活にもかなりご不便をお感じになっていたのではないかと思います。おりました。「いや、うちの家内もかわいそうだよ、病院では手をしばられているのでね」とおっしゃっていたこともありました。それに太田先生の奥様でさえ、一ヵ所に安住出来ず「3ヵ月ごとに転院を繰り返しているのだよ」と嘆いておられたのを覚えています。先生も随分お気の毒にご苦勞をなさっているなと思っていました。私ごとながら、私の父も痴呆で介護に困った経験があるので、なおさら、先生のご苦渋が身に沁みてわかる気がしたものであります。

さて、先生との最初の出会いです。確か昭和36年頃であったと思います。私は当時New YorkのMemorial Sloan Kettering Cancer CenterのCytology ServiceのFellowとして過ごして参りましたが帰国後Dr. Leopold G. Kossが太田先生を紹介してくれて、その“Diagnostic Cytology”という細胞診の本の和訳をすることになりました。そもそも太田先生は

以前に私のいた上述の Memorial Cancer Center にご在籍になり病理組織学を、研究者としてよりは一病理医としてご研鑽になり、多数の組織標本をごらんになった数少ない日本人病理医だとうけたまわっております。わが国の病理医は実験病理をよしとして、日常のいわゆる surgical pathology は一段低いものとみる悪い癖がありますが、太田先生は既に当時高名であったにも拘わらず、敢えて日本では低い地位にあった“病理組織標本を顕微鏡をみて診断する”ということをされたわけで、その勇氣には心より感嘆するものであります。しかし、そういう太田先生の真摯なご努力がわが国の普通の、しかし臨床にはきわめて重要な病理組織学の発展に大きな貢献をしたことは疑う余地はありません。

先生のお人柄を偲ばせるエピソードを一つ。今でも忘れもしませんが、私が帰国後最初に太田先生のお部屋にご挨拶かたがた前述の Dr. Koss 著 “Diagnostic Cytology” の和訳について打ち合わせに参上した時、

私に対する先生の態度は実に丁重そのものであったのを憶えております。考えてごらん下さい、一方はその道の大家で大学教授という地位にある方であり、他方、私は未だ 36 歳位の未経験な若造でした。当然、鼻であしられるのがおちとっていましたのに余りにも丁寧な、先生のご対応にはこちらがかえってびっくりしたくらいでした。特に強く印象に残っているのは、私が先生のお部屋を辞して戸口で一礼しようと振り向くと先生は立ったまま、こちらをじっと見送っておられて、こちらの挨拶に軽く礼を返されたことです。この時、本当に偉い先生は決して偉ぶらず目下や年下の者にも丁寧なのだと思いました。私はそれ以来、来客の時は相手が誰であっても必ず見送ることにしています。これは先生が私に与えて下さった無言の教訓として、ありがたく受け継ぎ、守らせて頂いております。

太田先生とはそういう方でした。

最後に先生のご冥福を心からお祈りしております。
合掌

太田邦夫先生と細胞診

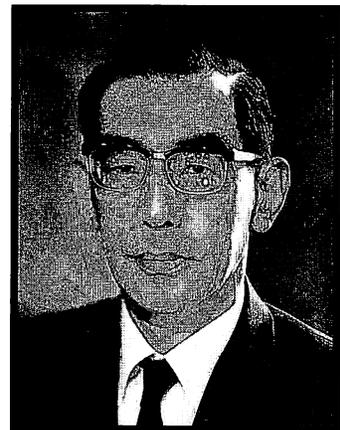
獨協医科大学 山 田 喬

語り盡せない先生についての多くの思い出を、限られた紙面において書くことは、あるいは先生の肖像をゆがめるような結果になるかもしれない。しかし先生の存在についてすら知らない若い人がすでに多くなっている現在、今書かなければ再びそのチャンスが来ないかもしれないことを懸念して、思い切って書いてみたい。

すでに先生についての二、三の追悼の文が他誌に発表され、本誌にも数名の方々が書かれるとのことなので、内容の重複を避け、先生の細胞診との関わりについてのみ書いてみたい。そして先生の弟子の末席に連なる一人として、きわめて個人的ではあるが先生の姿の一端を少し書いてみたい。

先生は決して細胞診そのものを実践されたわけではない。終始病理組織学者として一生を貫いた人ではあるが、わが国においてつとに細胞診について理解を示され、日本臨床細胞学会の創立の当初から、癌研増淵一正先生の依頼に応じられて、本学会の理事となられた。大学を停年退職後は名誉会員になられた。

先生の業績のなかで、細胞診との関わりについてはまず何んといっても、子宮頸部の上皮内癌(CIA)についての本格的な病理組織学的研究が挙げられる。なお



CIA の認識の可能性について疑問視する人々の多かった当時、先生のこの仕事により、その存在がわが国にも一般に知られるようになったことは事実である。その意味で現在の婦人科細胞診の発展の基礎を築かれたということが出来る。この上皮内子宮頸癌の仕事に基づいて 1964 年には、さらに細胞診と組織診は上皮内癌の認識の場において大接近したことも先生は鋭く指摘している。

しかし、上記の研究以上に大きな先生の細胞診への

貢献は、細胞診の診断学的立場を理論的に明らかにし、それを明快な表現により発表したことにあり、小生は確信している。

その内容が発表された1950～1960年代には、なお細胞診の可能性を否定する人が多く、細胞診に従事している者は四面楚歌の状態に置かれていた。したがって、先生のこの指摘は少くとも小生にとってどれだけ大きな心の支えになったか計り知れない。これは恐らく小生のみではないと思われる。そこでこの先生の指摘の一部を引用したい。

「基礎癌学の立場からはパパニコロウの方法は、一つの大きな革命を腫瘍形態学の場にもたらしたとみることが出来る。(中略)悪性腫瘍では浸潤増殖の問題すら、浸潤される組織の側の被害によって漸く認識されるのが常である。パパニコロウ方式は逆に悪性腫瘍細胞そのものを直接に把握することの可能性を指摘している。「癌は組織である」というテーゼは「癌は細胞である」という立場にとってかわられようとしている。」と書いている。

さらに細胞診の効用はその実利性にあることを強調して次のように書いている。

「然し、パパニコロウ自身は決してこのような大胆な結論を強調していない。彼はあくまで臨床上の実用性を述べているに止る。また、上にのべたテーゼは、まだまだ解明されていない諸点を包蔵している。彼の方式は理論的には隙間だらけながら、人体材料についての実績で、その可能性の限界をしめしている。」と。

この言葉こそは先生の面目躍如たる表現である。細胞診について深い理解を示しつつも決して熱狂的(enthusiastic)にならず、常に冷静に論理を究めている。それは親しい友人が訪れた際に、その帰りの玄関において、靴を揃えてあげるような、細かい気配りさえ感じられる。

この細胞診についての先生の先見の明は決して単なる思いつきではない。先生の臨床病理学的研究の行きつく場所が細胞学的認識に繋がっていることも事実であるが、それよりも先生のpast historyに基づく発想であると小生は考えている。

先生は若い頃(昭和30年代)、単身で米国へ留学されて臨床病理学を経験された折に、ニューヨークのメモリアル癌センターにおいて世界の細胞診の泰斗である高名なDr. Leopold Kossと机を並べて勉強されたことがあり、その頃病理組織学的研究とともに細胞診断学についての学識も深められた。その結果から生れた上記の発言であったと小生は思う。

ここに記した細胞診についての業績は先生の生涯の仕事のほんの一部にすぎない。燦々たる臨床病理学的研究とともに先生は実に多くの病理学者を東京医科歯科大学、癌研、東京大学そして都立老人研究所において育てられた。一人の秀れた先生が育てた病理学者の数は、恐らく現在過去を通じてわが国では最も多いのではないかと思われる。

先生は類稀な学問に対する秀れた資質をお持ちになるとともに、山のような努力の人でもあった。教室内では少くとも弟子の誰れよりも勉強され、涉猟された文献の数は莫大であったことも書かねばならない。そして教えて戴いた者が茫然とするくらい広い学識をさりげなく口にされた。

牛乳瓶の底のような度の強いメガネを通して、レーザー光線のように人の命の一番大切な部分をも焼き切るのではないかと思うくらいに鋭い視線でみつめられると、小生なぞは正に文字通り粗鄙浅露の身をいつも恥じ入るばかりであった。学問に対する厳しさとともに、酒宴ですら乱れることのない先生の剛直さが、そのように大袈裟に感じさせたのかもしれない。

先生の人生の後半は必ずしも幸せでなかった。東京大学医学部へ移された後に、心ならずも学生紛争に巻き込まれたこと、晩年になり奥様が長期にわたる難病に侵されたこと、そして最後に先生自身が最も熟知されている膵臓癌に侵され、死の近いことを知りながら、平然と過されたことなど、何んとも悲しい事々の連続であった。

神は、掛け替えのない秀れた先生にかくもおぞましい仕打ちをされたものと恨みたくなることばかりであった。

先生、安らかにお眠り下さい！先生の播いた種(弟子)は、いま日本の各地で多くの花を咲かせていることを知って戴くことがせめてもの慰めとと思っています。先生の戒名のなかの一字に“秀”の字が入っていたことが、小生の大きな喜びであったことを報告してこの拙文の終りとしたいと思います。

文 献

太田邦夫：上皮内癌あるいはCarcinoma *in situ*について。医学のあゆみ 17：250～272, 1954。

太田邦夫：パパニコラウ法の意味するもの。医学のあゆみ 21：155, 1956。

太田邦夫：病理組織学と細胞診—特に初期癌の認定に関連した諸問題—。日臨細胞誌 3：57～62, 1964。(第5回日臨細胞学会総会特別講演要旨)

第13回国際細胞学会についてのお知らせ

第13回国際細胞学会会長 加藤 治 文

皆様ご承知のように来年の5月10日～14日の5日間、東京、西新宿の京王プラザホテル（写真1をご参照下さい）で第13回国際細胞学会が開催されます。学会の参加登録および演題募集を既に開始しております。参加登録および抄録申し込みにつきましては次の通りです。

参加登録用紙および抄録用紙をご希望の方は、下記事務局までご連絡下さい。

事務局：〒160 東京都新宿区西新宿 6-7-1
東京医科大学病院 国際医学情報センター
第13回国際細胞学会事務局
Tel：03-3342-6111 (ext. 5072)
Fax：03-3342-0860
e-mail：iactokyo@gol.com

早期登録：1997年12月31日まで

この期間に登録していただきますと、早期登録の参加費が適用となり、1998年以降よりも安く参加登録が可能です。

抄録締切り：1997年12月20日

指導医の皆様のご参加・ご発表をお待ち申し上げますとともに、是非指導しておられる若い先生方、スクリーナーの方にもお声をおかけ下さい。

今回、細胞診指導医会会報に第13回国際細胞学会のトピックスを掲載させていただける機会をいただきましたので、すでに決定しておりますことを中心にご報告させていただきます。

第1日（5月10日）オープニングセレモニー

東京オペラシティホールにてオープニングセレモニーが開催されます。本施設は国立第二劇場とともに新しい東京新都心の芸術文化の中心となるべく設立されたもので、国内でも例の少ない木質系内装を統一され、世界的にも屈指の音響空間を誇るコンサートホールとなっております（写真2をご参照下さい）。このすばらしいホールに日本を代表するNHK交響楽団の団員ならびにOBから構成されるNHK団友オーケストラを迎え、第13回国際細胞学会の開催を宣言し、翌日からの学会を実り多いものとなりますよう祈念し、ひととき、すばらしい音楽に皆様とともに身をゆだねたいと思います。曲目はどの皆様にも十分楽しんでいただけるよう配慮してございます。クラシックファンである方も、そうでない方も十分ご満足いただき、翌日からの国際学会に向け英気を養っていただけ



写真1 学会会場：京王プラザホテル
（前方は東京都庁舎）

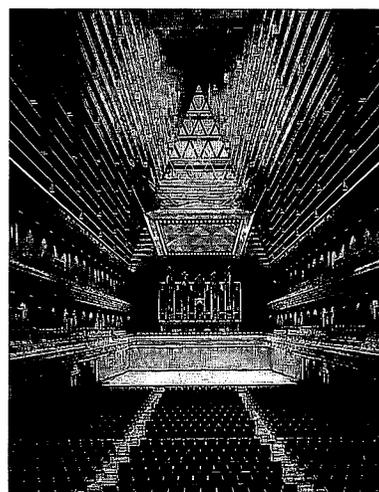


写真2 オープニングセレモニー会場：東京
オペラシティコンサートホール

るものと信じております。東京オペラシティホールは京王新線初台駅に隣接し、学会会場である新宿京王プラザホテルからも徒歩にてアクセス可能な場所があります。また当日は学会会場より専用バスを運行する予定であります。

学術集会（5月11日～14日）

（会場：京王プラザホテル）

Award lectureとして内外8名による講演を、パネルセッションとして15のトピックスを予定しています。また、Endometrium/endocervix half-dayとして4時間、Cytotechnologist's dayとして8.5時間の講演を設け、それぞれ集中して討論していただきます。一般演題は、Main ThemeをThe present and future of cytologic diagnosisとして広く募集いたします。

パネルセッションのトピックスは、婦人科系が Adenocarcinoma *in situ* and related lesions of the uterine cervix, Genetic aspects of uterine cancer, Endometrial cancer and related lesions, HPV infection of the lower female genital tract の4演題、消化器系が Cytologic diagnosis of bile duct, gall bladder and pancreatic diseases, Puncture and aspiration cytology of the liver の2演題、呼吸器系が Cytologic diagnosis in respiratory tract の1演題、病理が Cytology of endocrine tumors, lymph nodes and soft tissue, Teromerase の2演題、乳腺、甲状腺が Aspiration cytology findings of breast cancer の1演題、泌尿器、体腔液が Urology and body fluid の1演題、Telecytology として、Telepathology の1演題、Computerized cytology として、Automated cytology device, Integrated technology in the clinical cytology laboratory, Quantitative cytology の3演題を予定しており、それぞれ5、6名の演者に討論していただきます。

Endometrium/endocervix half-day (5月12日) では、Congress lecture, The James Reagan Award lecture, Basic Research Today と題した講演などを行います。

Cytotechnologist's day (5月13日) では、シンポジウム(細胞診技術と細胞診技師の各国の現状)、キーノートレクチャー (Endocervical Adenocarcinoma)、スライドカンファランス、特別講演(Supravital 染色 (Sternheimer 染色) とパパニコロー染色を用いた尿細胞診、病理細胞検査室における Quality Control 測定法の導入)を予定しています。Cytotechnologist's day は日本語の同時通訳が入ることになっております。指

導しておられるサイトスクリーナーに参加の便宜を図っていただければ幸いです。

現在、各方面の先生方のご指導を賜りながら、医局員一同プログラム作成に全力を尽くしております。皆様に興味を持って参加していただける内容にしたいと考えます。

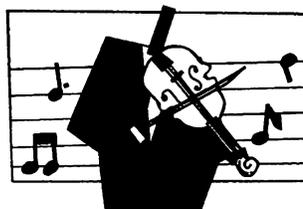
指導医の皆様におかれましては是非最新の研究内容・診療データをお示しいただき、世界の研究者とともにディスカッションする機会としていただきたいと思っております。

メインバンケット (5月12日)

5月12日は学会会場である京王プラザホテルにて、メインバンケットを開催いたします。世界中の研究者、サイトスクリーナーの方と同じテーブルで食事を召し上がりながら、研究のあるいは趣味のお話に花を咲かせていただけるものと思っております。来賓の方のご挨拶とともに楽しいアトラクションもご用意いたしました。特に外国のお客様とともに喜んでいただけるよう配慮いたしました。また会の最後には、阿波踊りをご披露し、皆様とともにいっとき多忙な毎日を忘れ、楽しい思い出としていただけると確信しております。

現在、医局員一同、学会参加・演題募集・プログラム作成・各方面へのご協力をお願いなどに全力を尽くしております。本学会は今世紀最後の国際細胞学会であり、21世紀の細胞診断学のあり方についての方向性が示される学会となります。

学会が皆様にとりまして実り多く、また楽しい思い出となりますよう祈念いたします。



1996年度第2回指導医会議事録

日 時：1996年（平成8年）11月29日（金）

場 所：三重県サンアリーナ（第1会場）

出席者：699名

議題に先立ち、1996年度第1回指導医会議事録（案）が一部修正され、承認された。

議 題

A. 報告事項

1. 庶務報告（加藤治文 庶務担当）

会員数：9,022名（医師4,109名、技師4,848名、
図書65名）

指導医数：1,356名（実数）

FIAC：111名 MIAC：89名

CT（IAC）：3,671名

CT（JSC）：4,570名（実数）

（物故会員）

名誉会員 村上忠重先生（元 東京医科歯科
大学教授）

指導医 寺内 博先生（寺内産婦人科院長）

指導医 額額 博先生（名古屋赤十字病院）

細胞検査士 西村良秋氏（高知市立市民病院）

黙 禱

2. 指導医会総務選挙結果報告

（杉森 甫 指導医会会長）

指導医会総務10名の任期満了（1996年12月31日）に伴い、下記の通り、選挙を行った。

開 票：平成8年10月18日（金）

場 所：癌研附属病院7階会議室

出席者：杉森 甫 指導医会会長

矢谷隆一 あり方委員会委員長

山内一弘 幹事

投票結果

長谷川壽彦、東岩井久、加藤治文、蔵本博行、
野澤志朗、坂本穆彦、柴田偉雄、杉森 甫、
杉下 匡、矢谷隆一

以上10名の総務が選出され、承認された。

任 期：平成9年1月1日より平成11年12月
31日とする

次期指導医会会長は、選出された10名の総務の互選により、本日の指導医会にて報告され、承認される。

3. 1996年度（平成8年度）指導医資格更新について

（工藤隆一 指導医委員会委員長）

資格更新該当者：196名 指No. 774～指No. 899

指No. 1171～指No. 1241

更新締切日：平成8年12月15日

平成8年12月24日（火）に指導医資格更新審査委員会
で審査し、平成9年1月18日（土）の指導医委員会
で最終審査を行い、平成9年第1回日本臨床細

胞学会理事会に報告して、更新業務終了となる。

4. 細胞診指導医資格認定試験の改正について

（工藤隆一 指導医委員会委員長）

1) 細胞診指導医試験施行細則・細胞診指導医試験
実施要項を改正することについては、本年の細胞
学会理事会で了承されているので、指導医委員会
で検討し平成9年の細胞学会理事会に報告して承
認される。

2) 平成9年度細胞診指導医資格認定試験より実施
される。

3) 細胞診指導医試験施行細則・細胞診指導医試験
実施要項の改正が整い次第、日臨細胞誌に公示す
る。

4) カラーライド試験の対象は、全員が全科の細
胞診断における基礎的な問題について行う。

5) 具体的には、細胞診断学セミナーで教育される
内容を基準として出題する。

6) 鏡検試験の選択領域として

① 総合科、② 婦人科、③ 呼吸器科、

④ 泌尿器科、⑤ 消化器科、⑥ 乳腺・甲状腺科
とする。

5. 1996年（平成8年度）指導医資格認定試験日程に ついて

（坂本穆彦 指導医試験実施委員長）

日 時：平成8年12月8日（日）

場 所：東京国立教育会館

受験者数：88名（総合科：40名、婦人科：38名、内
科・外科系：10名）

6. 1997年（平成9年度）指導医資格認定試験日程に ついて

（坂本穆彦 指導医試験実施委員長）

日 時：平成9年12月7日（日）

場 所：東京国立教育会館を予定している。

7. 1996年（平成8年度）第29回細胞検査士資格認定 試験報告

（長谷川壽彦 試験実施委員長）

（第一次試験）

日 時：1996年（平成8年）11月17日（日）

場 所：東京；東京医科大学（※本年度より）

大阪；チサンホテル

福岡；九州大学医学部

727名が受験し、266名が合格した。（合格率36.6%）

（第二次試験）

日 時：1996年（平成8年）12月14日（土）、

15日（日）

場 所：東京医科大学

受験者数：一次試験合格者 266名

28回試験一次合格二次不合格者 139名

合 計 405名

の予定である。

8. 第13回国際細胞学会案内

(加藤治文 国際細胞学会会長)

日時：1998年(平成10年)5月10日(日)

～14日(木)

場所：東京、京王プラザホテル

只今準備中である。(日臨細胞誌35巻6号に掲載予定)

9. 細胞学会渉外委員会報告

(山内一弘 IAC小委員会委員長)

1) Cytopathologist 試験案内

日時：1997年(平成9年)6月15日(日)

場所：東京医科大学付属病院

受験資格：MIACになって3年以上

2) 国際細胞検査士資格認定試験案内

日時：1997年(平成9年)6月15日(日)

場所：東京医科大学

10. 日本細胞診断学推進協会役員・代議員選挙結果報告

(天神美夫 日本細胞診断学推進協会理事長)

新たに制定された日本細胞診断学推進協会会則に従って選挙を行った。

(代議員選出結果)

平成8年9月24日開票を行い、指導医代議員76名、検査士代議員76名が選出。指導医代議員のうち1名の辞退があり、151名が決定した。

代議員任期：初年度のみ、平成10年3月31日までとする。

(役員選挙結果)

代議員151名に選挙書類を発送し、平成8年10月16日開票を行った。

指導医役員6名、検査士役員6名、理事長推薦4名、合計16名の理事が新しく選出された。

日本細胞診断学協会当初の理事8名、監事2名を含め、日本細胞診断学推進協会の役員総数は、29名となった。

(理事長1名、副理事長1名、専務理事1名、監事2名、理事24名)

役員任期：初年度のみ、平成10年3月31日までとする。

11. 平成8年11月29日(金)に日本細胞診断学推進協会第1回理事会、日本細胞診断学推進協会第1回代議員会を開催した。

12. その他

1) 細胞検査士健康管理委員会報告

1996年度資格更新者と新細胞検査士(1996年度試験合格者)を対象に健康管理に関するアンケート調査を行う。

2) 指導医会会報NO.16号が会場にて配布された。

B. 協議事項

1. あり方委員会報告並びに提案事項について

1) 指導医資格更新の件

指導医会出席義務

(現行) 4年間に3回以上出席し、200単位を満たす。

(改正) 4年間に2回以上出席し、200単位以上にする。

という案が提出され討議された。

平成9年1月の細胞学会理事会、指導医委員会で審議して、春の総会で決定する。

指導医会出席だけでなく、学会出席も検討していく。

平成9年度の資格更新から適用するために、至急審議していく。

2) 教育指導医の件

細胞検査士の教育指導医は複数でも構わないが、登録指導医はあくまでも1人である。

細胞検査士が資格更新を申請する時には、登録指導医が責任をもって更新の承認印を押すことになっている。

細胞検査士側にもこの主旨を十分理解してもらい、登録指導医を通じて教育指導医へ依頼して頂くよう申し入れた。

2. 法人化に伴う諸問題について

(天神美夫 日本細胞診断学推進協会理事長)

1) 日本細胞診断学推進協会の設立に伴い、指導医会、検査士会は当診断学推進協会の中に移行となったが、名称はそのままとする。

2) 指導医と細胞検査士の職能団体として発足した日本細胞診断学推進協会を社団法人化するために努力していく。

3. 指導医会会長選出の件

(杉森 甫 指導医会会長)

臨時総務会を開催し、新総務10名の互選により、杉浦 甫 現会長が再推薦され、承認された。

(杉浦 甫 会長挨拶)

細胞学会の中にあつた指導医会は、平成8年6月より検査士会と共に、日本細胞診断学推進協会のもとに移行した。

今後は、指導医の業務、目的、指導医のあり方、法人化に向けての諸問題、検査士会との問題等に指導医会の先生方のご協力を得ながら、細胞診断学の発展を目指していきたい。

4. その他

編 集 後 記

過去と未来が交錯する横浜での第36回日本臨床細胞学会秋期大会で細胞診指導医会会報第18号をお届けします。会報トップとして秋期大会岡島弘幸会長に、学会開催のメッセージとともに、近代日本の歴史を印し、また次世紀に向けての計画的街作りが完成の域に達した横浜の地をご紹介いただきました。

支部連合会紹介は、北陸支部連合会を谷本一夫会長にご紹介いただきました。一番小さな連合会とご謙遜されていますが、ご紹介のように多くの先駆者を輩出した地方であり、谷本会長を中心として今後ますますの発展を多いに期待してよいものと思われまます。

第22回細胞診断学セミナーを担当された東岩井久教育委員会委員長に、同セミナーについての感想をいただきました。指導医試験と関係深いセミナーになり、総合的知識の教育に気を配られた経緯を述べられています。

細胞診指導医会会報第18号は、蔵本博行新編集委員長が引き継いで2号目にあたり、新編集委員会としてアイデアを募り新しい企画を取り入れました。過去には、指導医としての細胞診への関わり合いを、多くの先輩指導医が思い入れを込めてご投稿され、読者としては普段着の先人を知り感銘を受けました。今回は、指導医としてご活躍中の先生を、その先生と親しい関係にある別の指導医にご紹介いただくことにしました。第1回は、日本臨床細胞学会大分県支部支部長として、あるいは各種学会で八面六臂のご活躍の谷口一郎先生を千葉市立病院岩崎秀昭先生からご紹介いただきました。さらに“細胞診指導医になって”を国立栃木病院産婦人科佐久間雄一先生と鳥取大学第1外科貝原信明教授にお願いしました。新進気鋭の佐久間先生と医療人として歴史を刻まれた貝原教授、それぞれ持味を出された文章になっています。

佐々木研究所附属杏雲堂病院杉下匡副院長に、ハワイ国際細胞学会 Expert Conference の印象記をお願いしました。このカンファレンスは、各国から招待された細胞診専門医による特別企画のミーティングであり、21世紀における細胞診の方向性を見定めることを目的としています。そこで討議された内容の詳細は、まもなく明らかになると思えますが、内容の一端を垣間みれると思われまます。

先頃ご逝去なされたお二人の日本臨床細胞学会名誉会員、鈴木忠雄先生と太田邦夫先生の追悼文を、お二人の先生をよくご存じの岡島弘幸先生、石東嘉男先生と山田喬先生からいただきました。ご冥福をお祈りします。

第13回国際細胞学会加藤治文会長の学会案内を“第13回国際細胞学会についてのお知らせ”として掲載しました。日本臨床細胞学会は、世界最大規模を誇る学会で、この国際学会を立派な会にしてこそ日本の実力を世界に示せることになると思われまます。細胞診指導医が多数参加し、きたるべき21世紀の細胞診について論議を尽くすことが望まれます。

細胞診指導医会会報編集委員会は、蔵本編集委員長をはじめ編集委員一同常に前向きな態度での編集を心がけています。会報の在り方や内容などについてのご意見があれば遠慮なくお寄せください。会報が指導医への情報通達の場合ばかりでなく、意見交換の場になればと願っています。

(長谷川壽彦)

細胞診指導医会会報編集委員会

委員長：蔵本 博行

副委員長：長谷川壽彦

委員：阿部 庄作, 覚道 健一, 柴田 偉雄, 上坊 敏子, 諏訪 敏一, 山内 一弘